



2004 月 10 月発行

## 真理は自由を得させる

「真理はあなたたちを自由にする。・・・罪を犯す者はだれでも罪の奴隷である。奴隷は家にいつまでもいるわけにはいかないが、子はいつまでもいる。だから、もし子があなたたちを自由にすれば、あなたたちは本当に自由になる。」(ヨハネによる福音書8章32~36節)

「真理はあなたたちを自由にする」、と言う聖句は、聖書を代表する言葉の一つです。我が国の国立国会図書館にも、この言葉が刻まれています。この場合、真理は精神世界の真理にしろ、自然科学の真理にしろ、人間を暗黒の世界から解放し、人間に自由を与えてきた人類の歴史の事実に基づき、いかにも真理発見の場である図書館には、これ以上ないふさわしい言葉として、聖書のこの言葉が選ばれたのでしょうか。

確かに、この選択は場違いとは言えません。が、しかし、それが聖書本来の意味ではないことを、私どもは心得ておく必要があります。と言うのは、主イエスご自身が、「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」(同14:6)、と言っておられるように、ここで言う真理とは、一般的な真理ではなく、外ならない主イエス・キリストのことだからです。しかも自由にするとは、単に無知や迷信、先入観や思い込みから自由にすると言うのではなく、何より罪からの自由を言っているのです。

一国を支配する力を持つ者にとっても、自分を正しく治めることは至難の業です。自分を見失わないように、常に感情をコントロール出来る者は、皆無と言ってよいのではないのでしょうか。感情だけではありません。たとい冷静でも、自己中心、自己義認、自己絶対化、それに様々な欲、即ち物欲、情欲、名誉欲、邪な野心等々、人間はこうしたものに引きずり回されて、決して自由ではあり得ない、正に“罪の奴隷”だと言う主イエスの御指摘は、誰も否定できないのではないのでしょうか。

聖書は、こうした罪の奴隷となった者たちの話に事欠きません。旧約聖書を読み始めて僅か5頁行った所で、私どもは早々とカインが弟のアベルを殺すと言う、身内で起こった殺人事件に出会います。元はと言えば、嫉妬に狂ったカインが、その感情を抑え切れなかったために起こったことなのです。

名君と仰がれたダビデの、一世一代の大失策、パテシパとの不倫も、成功による気の緩みもあったのですが、結局は、情欲の虜となったダビデが、自分を制し切れなかったと言うことなのです。彼は、犯した罪に愕然とし、悔い改めの歌を歌いました。詩編51編がそれです。その14節で、「御救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください」、と歌っています。罪の奴隷である自分を自由にするものは、神の霊以外にはないので、その霊をもって、何時も自分を罪より解き放ってください、と神に訴えているのです。

もう一人、忘れられない人物がいます。「わたしは罪人の頭だ」(テモテ1:15)、と言ったパウロです。彼は、善をなそうとする自分と、それを実行できない自分との自己分裂に苦しみ、「わたしはなんと惨めな人間なのか」(ローマ7:24)、と呻きました。しかし次の瞬間、そんな自分を、神はキリストを通してお救いくださったと感謝しました。

ルカによる福音書15章に出てくる放蕩息子は、自由を求めて父の許を去ったのですが、彼が求めた自由は、単なる欲望追求に過ぎず、何をも生み出さない不毛の自由でした。それに気付いた時、彼は父の許に帰って行きました。真の自由は、父の子として生きる所にこそあることを、彼は大きな代償を払って悟ったのです。代償とは言っても、それは元々父の物だったのです。私どもが父なる神の子とされるためにも、大きな代償が払われました。イエス・キリストの十字架の死です。私どもは、このお方のお蔭で、今既に神の子の自由を得ているのです。 牧師 三輪恭嗣

(2004年9月5日の礼拝説教より)